

短期大学における英語プログラム改革の試み

個別・少人数教育による発信重視の指導と e ラーニングの活用

藪田 由己子・村田 信行・トーマス・ジョエル・中村洋一・飯野 厚

Program Innovation of Compulsory English Program in a College Instructing Students in Small Classes and the Implementation of e-learning Programs

Yukiko Yabuta, Nobuyuki Murata, Joel Thomas, Youichi Nakamura, Atsushi Iino

1. はじめに

文部科学省により『英語が使える日本人』育成のための行動計画が策定されてから 8 年が経過した。この行動計画の中では「大学を卒業したら仕事で英語が使えること」という非常に高い目標が掲げられている一方で、英語力も含めた大学生の学力低下が叫ばれており、大学におけるリメディアル教育は避けては通れないと問題になってきている（酒井, 2011）。大学生においても中学校程度の基本的な文法がわかっていない、基礎的な単語が読めないなども見受けられるのと同時に、大学入試形態の多様化により、学生の学力差も大きくなってきているのが現状である。また意欲面においても、中学校、高校で一度苦手意識を持つと、大学まで続く傾向があるとの報告もある（Kiyota, 2009）。このような現象は本学国際コミュニケーション科も例外ではなく、今までの英語教育を見直すために、2008 年度～2010 年度まで 3 年間、短期大学での英語教育カリキュラム改革に関する共同研究を行ってきた。本稿においては、カリキュラム改革の詳細を述べるとともに、その成果と今後の英語教育への課題を示したいと思う。

2. 研究の背景

本学国際コミュニケーション科においては、「英語演習 I および II」、「英会話 I および II」が学科の必修科目（2010 年より英語演習 I、英会話 I のみ）となっており、全学生がある程度の英語力を身につけることを目指している。しかし、近年では入学する学生のレベルや経験も様々であり、多様な学習歴を持つ学生が 1 つのクラスに混在することになり、そこにはいくつかの問題が浮かび上がってくる。

第一に、学習習慣の問題があげられる。授業を提供する側としては、大学で学ぶ前提としての動機づけや学習習慣が高校までについていることを期待しているが、実際には動機づけが低く、自から学ぶことが習慣化していない学生が多い。外国語の習得には、学習者が自ら課題を発見し学習機会を求める主体的な取り組みと、その取り組みを自らに

課して学習を続けていく自律的な学習態度が不可欠である。自律的な学習者とは、学習管理、認知プロセス、学習内容という3つのレベルにおいて自分の学習をコントロールできる学習者と考えられている（大学英語教育学会学習ストラテジー研究会, 2006）。授業、授業外活動なども含めた大学生活の中で、自分で学習計画を立てて自律的な学習者になるのは容易ではない。しかし、いったん自律的な学習習慣が身に着けば、それは英語学習以外にも波及効果を生むものだと考えられ、学習全般において良い影響を与えるのではないかと思われる。

第二に教員の役割があげられる。前述したように、語学学習は自らのモチベーションにより行われる能動的な取り組みであるべきで、教員が伝授する知識を受動的に理解するだけでは不十分である。この点において、教員は知識の保持者というだけでなく、効率的な学習を手助けするファシリテーターの役割を担うべきであり、「教え込む」という授業から「学びとる」授業への転換が必要である。教員が学生の学習が進むように、ゆるやかにしかし厳正に学習者を管理することで、伝統的に行ってきた教員中心の授業から、学生中心の授業へと転換を図ることが求められる（岡, 2011）。

第三に学習時間の問題があげられる。2007年度までは英語演習、英会話ともに週1回90分の授業を行っていたが、英語に触れている時間が高校時代に比べて少なくなり、大学入学後に英語力が下がってしまう「中だるみ現象」が見られ、高校までの実力に上積みできていないばかりか、大学での英語力を伸ばし切れていないことも明らかになった。大学での90分の授業は、集中して英会話を行うにはやや長すぎるために学生の集中力が持続できず、授業時間全体を効果的に使えていないという問題があった。また、1週間に1回の授業では、特に英会話で実際に話してみようとする学生のモチベーションを維持することは難しく、頻繁に顔を合わせてやる気を引き出すことが必要であるのではないか、という教員からの声もあった。

このようなことを解消すべく、大きくカリキュラム改革を行い、英語力養成の課程を根本から見直すこととした。

3. 研究の内容と実践

3-1. 全体的な方針

全体的なカリキュラム改革の方針として、①CALL システムを活用し自律した学習者を育成する、②多読・英語ジャーナルにより受信・発信の両側面を鍛える、③コマ割りを工夫した上で英会話を少人数で行い、使える英語力を育成する、という3点を挙げた。

上記3点を実行に移すにあたり、1年次の授業の枠組みの改革を行った。従来では90分の英語演習、90分の英会話を週に1回ずつ行っていたところ、90分を2分割して45分の英語演習、45分の英会話を週に2回行うことにより少人数の指導体制を確立し、英会話ではプロダクティブなクラスを実現した。また、英語演習では、英語演習1として

CALL 教室を利用した学習、英語演習 2 として多読と英語ジャーナルを導入した。変更点は表 1 のとおりである。各取組みの詳細を次章から述べていきたい。

表 1 英語演習および英会話のカリキュラム変更点

変更前 (2007 年度まで)		変更後 (2008 年度より)	
授業時間	90 分×週 1 コマ	45×週 2 コマ	
クラス人数	1 学年を習熟度で 3 分割	1 学年を習熟度で 4 分割	
英語演習	30~35 名	25 名	
クラス人数	英語演習のクラスを 2 分割	英語演習のクラスを 2 分割	
英会話	15 名~18 名	12 名~13 名	
授業展開 (アルファベットは クラス名)	演習	会話	情報
	月	ab	cd
	水	ef	ab
	金	cd	ef
			ab
			cd
			ef
			gh
			gh
			cd
			ab

3-2. 英語演習 1 CALL を利用した学習

2007 年度秋学期より CALL 教室が運用開始となり、CALL 教室での英語授業が可能となった。英語演習 1 では「CALL システムを活用し自律した学習者を育成する」を目標とし、アルク教育社の ALC Net Academy 2 (以下ネットアカデミー) を教材として導入した。ネットアカデミーは LAN 環境で使用するネットワーク型学習システムであり、学内のサーバーに学習教材を置き、ネットワークを通じて学習者に教材を提供する。学習者は CALL 教室が開放されている時間であれば、いつでも教材にアクセスする事ができる。コンテンツはレベル 1~5 まで難易度別に分かれており、それぞれリスニングとリーディングのパートから構成されている。画面の操作などはパソコンの利点をうまく活用すると共に、多彩なマルチメディア機能とインタラクティブ性を活かした英語力育成のためのソフトウェアである。

3-2-1. 手順

授業は基本的には自学自習であり、学生が各自のペースで自分に合ったレベルの問題を学習し、教員はその学習をファシリテートする役目を担った。学期初めに 1 学期でこなさなければならないユニット数が提示され、学生は規定ユニットを修了させるために、授業時間と授業時間外の自習 (Self Access Learning Time: SALT) を使った学習計画をたて、その計画に従って学習を進めていった。SALT は自分の時間割の中から空き時間を 1 コマ登録し、その時間は必ず CALL 教室に行って学習を進めるという、自習を義務化し

た形であり、学生のモチベーションと持続性を高めるために、毎時間教員が CALL 教室へ確認に行き進捗状況をチェックした。学習範囲は 3 年間にわたる本研究の取組みの中で学生の動向を見ながら調整をしていたが、ユニット数が多すぎると 1 つ 1 つの学習がおざなりになってしまうため、最終的には英語コースの学生はリスニング、リーディングそれぞれ 15 ユニット、それ以外の学生は 10 ユニットずつを規定とした。

また、学生の自己流の学習に任せてしまうのではなく、授業時間を通して自学自習の質を向上させ、ときに無機質になりがちな PC 学習を血の通ったものにするのもねらいの一つであったので、自分の進捗状況が一目でわかるチェックシートを作成し、教員、学生が共通の認識をもち、必要なサポートや助言を求められるような体制を築いた。また、CALL 教室は大いに声を出してよい教室なので、授業終わり 15 分間でクラス一斉に音読練習を行い、中間、期末テストには音読テストも取り入れた。

2-3-3. 学生の反応

チェックシートを導入し、きめ細やかに進捗をサポートすることにより、ほとんどの学生が規定のユニットを修了することができた。授業時間以外でかなりの時間を費やさなければならぬ量であるが、意欲のある学生は規定を超えるユニットをこなし、やり遂げた成果を素直に喜ぶ姿も見られた。一方で、必修で仕方なく取り組む学生は、費やす時間の膨大さに不満を漏らすことが多かった。半ば強制的であるが、1 学期間の中で他の科目とのバランスを取りながら学習を進めていくことで、自学自習の習慣をある程度は養う事が出来たのではないかと思われ、この習慣は今後の語学学習にも活かされるものであると期待したい。

3-3. 英語演習 2 多読、英語ジャーナル

英語演習 2 では「多読・英語ジャーナルによる受信・発信の両側面を鍛える」という目標のもと、カリキュラムが設定された。英語演習 1 のネットアカデミーと同様、基本的には自学自習であり、教員中心の教え込む授業から学生中心の授業形態への変革を試みた。

3-3-1. 手順

多読では、自分の興味やレベルにあった英語の本をたくさん読んで楽しむ、簡単な英語をたくさん読むことにより、日本語訳を通さずに理解する癖をつける、単語の推測力を高めるとともに、知っている単語を忘れずに維持することを目標に、1 学期に 10 冊の本を読みブックレポートを作成することが課題であった。多読で使用する本は、主には英語学習者に合わせて使用する主要な単語を制限し、全体の量や文法事項を調整してある多読用の英語教材、graded readers を使用した。学生は図書館で本を手に取り中身を確

認しながら本を選び、1冊を読み終えた後は、話のあらすじ、覚えたいと思う単語やフレーズ、感想などをブックレポートに記入した。記入したレポートはその都度提出し、教員がコメントを書き、内容のでき具合に応じて3段階で評価しスタンプを押して学生に返却した。

英語ジャーナルは、1学期に8枚(A4両面で4日分が記入できる)提出を目標とした。学生は4日分の記入が終わるとジャーナルを提出し、ブックレポートと同様に教員がコメント、評価のスタンプを押して学生に返却した。

授業時間では、本を読んでいるか英語ジャーナルを書いている間に学生が1人ずつ教員に呼ばれ、5分程度の対面指導(コンファレンシング)が行われた。ブックレポート、英語ジャーナルともに内容の理解度や進捗度についてのコメントを伝えながら返却した。2010年度からは、学生全員に配布している清泉英語学習ガイドに載せている例文や文法事項について、授業時間の最初10分ほどで解説をする時間を設けた。

3-3-2. 学生の反応

受講したほとんどの学生がブックレポート、英語ジャーナルとも目標の枚数を終えることができ、一定の成果を上げることができたと考える。しかしながら、学生の課題に取り組む姿勢の個人差は大きく、毎週コンスタントに続けられる学生もいれば、継続的に課題を提出することができない学生も見受けられ、学期末にまとめて課題を終わらせるということもあった。また、多読に関しては読んでいる本の語数にかなりばらつきがあり、同じ10冊でもその内容には大きな開きがあったことは否めない。英語ジャーナルでは fluency を伸ばすことを目的とし、あまり細かく間違いを訂正せずにある程度英文を楽しんで書くことを目標としていたが、主語や述語の関係など、英文の構造そのものがわかっていない学生も見受けられた。もともと英語に苦手意識を持っている学生は、最初の1カ月程度で書くこと自体をあきらめてしまい、ただ枚数をこなすだけの姿勢に対してはどのような指導をするかが今後の課題である。また、コンピュータの自動翻訳を使い、その英文をそのまま書き写していると思われる例も散見された。このことも今後解決しなくてはならない課題である。

3.4. 英会話

英会話においては、コーパスベースのテキストである Touchstone 2 (Cambridge University Press) を新たに採用し、45分の授業を週2回にする取組みを行った。このことにより、クラス人数を以前より少なくし、より密度の濃い会話練習が行えるようになった。自学自習の英語演習とは対照的に、Face-to-Face のコミュニケーションに焦点をあてて、英語学習全体の中で学習スタイルのバランスをとった。

3-4-1. 手順

英会話は、英語演習の1クラスをさらに2分割して行い、全てのクラスをネイティブスピーカーの教員が担当した。テキストはUnit A から D まで4つのユニットで構成されており、1回のレッスンで1つのユニットを終了させるようにクラスを進めた。また、英語演習との連携を図るため、多読で作成したブックレポートの中から各自が選んだものに基づいて、口頭で本の内容を発表する機会を学期に2回設けた。また、学期に2回のスピーキングテストがあり、学生は2人1組になって与えられた場面において、3分から5分の会話をを行った。

3-4-2. 学生の反応

全体的な学生の反応は、授業に対して肯定的であり会話自体を楽しむ学生が多かった。習熟度で分けたクラスであっても、同じテキストを同じ進度で利用したので、下位レベルのクラスの学生には補助教材を作成するなどして対応したことも、モチベーションを維持することにつながったのではないだろうか。また、1回45分という授業時間は学生の集中力などから見ても適当であり、また学生と教員間のレポートも強まったためにより細かな指導ができるようになったので、90分を週1回行うよりは効果があったのではないかと思われる。

4. 結果と考察

プログラムの成果を測定するため、複数の方法で効果測定を行ったが、下記の指標は3年間通して継続的に測定をした項目である。それぞれの項目についての詳細を述べていきたい。

- ・全体的な英語力の指標としてCASECを1年に3回受験（4月、7月、1月）
- ・ネットアカデミーでの学習時間
- ・ブックレポートと英語ジャーナルのスタンプ数
- ・学生による授業評価

4-1. CASEC

CASECは旺文社グループの教育測定研究所が提供する、英語コミュニケーション力測定ツールであり、項目応答理論を用いたコンピュータ適応型テストである。語彙、表現、リスニング、ディクテーションの4つのセクションからなる1000点満点のテストであり、インターネット環境があればいつでもどこでも受験ができ、受験後即座にスコアが提示される。学生には入学当初の4月、春学期終了時の7月、秋学期終了時の1月にCASECを受験することを義務付けた。3年間の結果は表2のとおりである。

表2 CASEC トータルスコアの平均値 (学生全体)

	4月		7月		1月	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
2008年 (N=87)	350	103.6	381	115.0	404	119.8
2009年 (N=89)	357	99.0	388	94.8	416	98.9
2010年 (N=82)	349	103.6	374	117.9	—	—

2010年度は英語演習の必修が1年次春学期までとなり、秋学期は英語コースおよび希望者だけとなったため、比較できるデータとしては2008年4月から2010年7月までとなった。表3にある各学期間の伸びをみると、2008年、2009年のデータでは、4月から7月の伸びは約30点、7月から1月は約25点で、1年間では2008年は54点、2009年は59点の伸びが見られ、2010年はやや伸びが鈍ったものの、時間の経過とともに順調な伸びを示した。この1年間の伸びは2006年の14点、2007年の11点に比べると大幅に改善され、本プログラムが一定の成果を出したと考えられる。また、4月と7月、7月と1月、4月と1月のスコアの平均値の差を検定したところ、いずれの差の間にも5パーセント水準で優位差が認められた。

表3 CASEC トータルスコア伸びの平均値 (学年全体)

	4月～7月	7月～1月	4月～1月
2008年(N=87)	31	23	54
2009年(N=89)	31	28	59
2010年(N=82)	25	-	-

本プログラムのもう一つの成果として、大学入学後に見られるいわゆる「中だるみ現象」が解消されたことがあげられる。図1からもわかるように、カリキュラム改革前の2006年度と2007年度では、7月に一度スコアが落ち込み、1月に向けて再び上昇するという現象がみられており、結果として1年間通して見るとあまり伸びが見られなかった。しかし、本プログラム導入後はこの中だるみ現象が解消され、時間の経過とともに順調な伸びを見せたことは成果の一つであった。

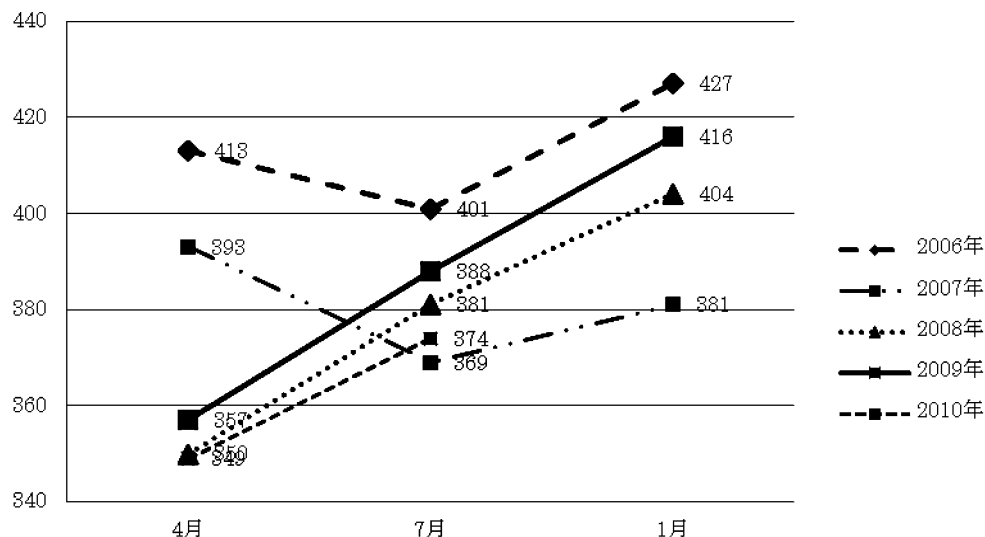


図1 CASEC平均点の年度別推移

しかし、一方では、入学時の英語力が低下したため、学生の伸び代が十分にあったと考えることもできる。1年入学時のスコアは、2006年は413点、2007年は393点であり、59点の伸びを示した2009年1年修了時のスコア（416点）は、2006年度の入学時とほとんど同じである。入学時の英語力はこの数年では約350点であり上昇の気配はない。CASECにおいて350点は英検3級程度に相当する。大学初年次の学力低下により、英語を含む基礎科目において、リメディアルの必要性は、今後さらに濃くなる可能性が考えられる。

また、図2と図3のトータルスコアの分布を見てみると、英語力に二極化の傾向がみられる。2008年、2009年は4月ではそれほど顕著ではなかったが、7月のスコアでは2008年は350点、500点、2009年は350点、450点とピークが2点観察される。これは、集団の中に能力の異なる2つのグループが存在していることを示しており、それぞれの集団の特性にあった手当が必要になってくる。現在は、学生の習熟度に応じてクラス分けはしているものの、教材、指導法、進度などは統一して授業を行っている。上位のクラスをさらに伸ばすためと、下位のクラスを補うための手立ては何かしら必要であり、この部分を面倒がらずに教員が時間をかけて行う事でさらなる教育効果を生むであろう。集団の特性を見る上でも、標準化されたテストCASECで測定を続けていくことは重要である。

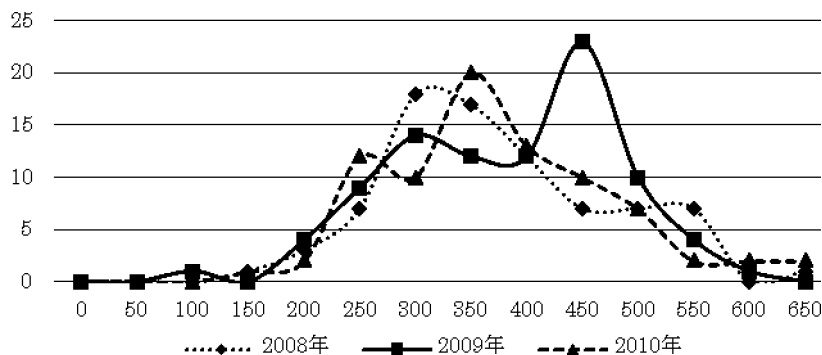


図2 CASEC4月トータルスコアの分布

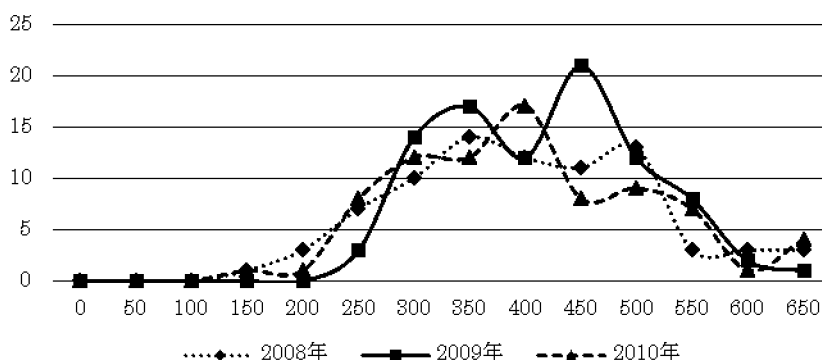


図3 CASEC7月トータルスコアの分布

参考までに、CASEC の受験を卒業時まで続ける英語コースのスコアの推移もみてみたい (図4)。英語コースは1年次の英語演習が終了した後は2年次の必修科目として、春学期に Essay Writing, English Communication I、秋学期に Advanced Reading と English Communication II を受講し、その他選択科目をいくつか履修するカリキュラムになっている。図4に示したように、1年次の伸びは60点~100点と英語専攻以外の学生より高い伸びを示しているが、2年次にその伸びを維持できていない傾向が見受けられる。2009年度はスコアがほぼ上がり続けたものの、2008年と2010年では2年次に入ってからスコアが下がり、1年次の実力を維持できていない。今後の1つ課題として、2年次の英語教育を充実させなければならないことをこの結果は示唆している。

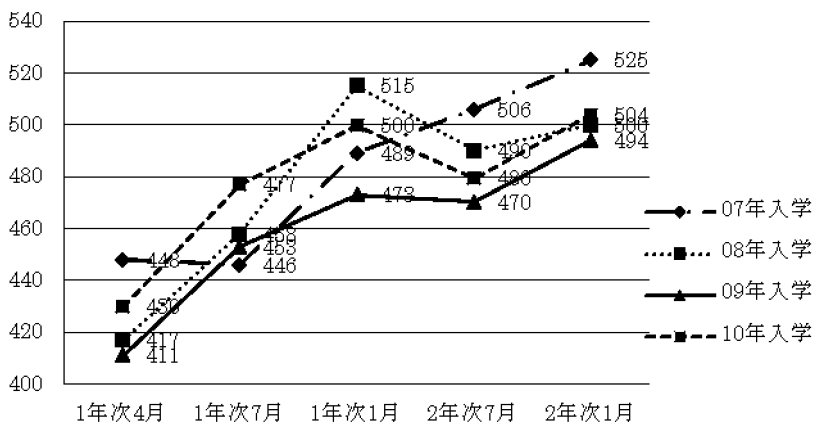


図4 英語コースCASEC平均点の年度別推移

4-2. ネットアカデミーの学習時間

ネットアカデミーは1学期で規定のユニット数を修了させる事が課せられていたが、学生はどのくらいの時間を学習に使ったのであろうか。規定のユニット数が年度によって多少異なるため、正確な比較は出来かねるが毎年の時間数を表4に示す。なお、この時間数はネットアカデミーのサーバーにアクセスしていた時間数であるため、アクセスはしているものの実際には学習していない学生も存在する可能性は否めない。厳密には学習時間とイコールではないが、CALL教室の学習状況を教員が観察している時に受け取る感覚とそれほど大きな差がないことから、この数字で比較をしてみたい。

表4 ネットアカデミー平均学習時間

	2008	2009	2010*
学習時間 平均	52:28:18	38:10:38	22:12:20
学習時間 最高	118:58:38	79:28:08	57:26:36

*2010年度は半期

どの学生も授業時間内で約30分の学習を10週間行ったので、上記時間の中の約5時間は授業内で学習したとしても、残りはSALTもしくはそれ以外に自らCALL教室へ行き、学習を行った時間である。授業時間以外でこれだけの英語学習をさせることができたことが、高校までの英語力を維持し、中だるみせず英語力が伸びた要因の一つであると言えるかもしれない。しかし、2009年度に付随的に行った学習時間とCASEC得点の伸びの相関係数からは、残念ながら両者の明確な関係性は見いだせなかった（全体の

相関係数は 0.118)。ただ、習熟度別で中程度のクラスでは 0.502 と比較的強いと言える正の相関の傾向がみられた。ある程度の時間を英語学習に費やすことは必要だとしても、上位クラス、下位クラスにおいては現在のような形態に加えて、何か別の手当が必要なのかもしれない。

4.3. ブックレポート、英語ジャーナルのスタンプ数

ブックレポートは1学期に10枚(1年20枚)、英語ジャーナルは1学期に8枚の提出が義務付けられており、内容の出来栄に応じてそれぞれに1~3つのスタンプが押されて返却された。それぞれのスタンプ数の平均値と最多数を表5に示す。どの学期においても学生達は提出枚数をクリアすることができ、最低1つ以上のスタンプを獲得した。2008年度、2009年度では春学期よりも秋学期のスタンプ数が増えており、より積極的に枚数を多く書く学生が増えたこと、内容が良くなりスタンプ数が増えたことがうかがえる。

表5 ブックレポート、英語ジャーナルのスタンプ数の平均

	2008 春	2008 秋	2009 春	2009 秋	2010 春
多読スタンプ数	14.5	20.8	17.5	20.9	19.29
最多数	29	41	40	52	34
日記スタンプ数	9.6	16.8	20.9	22.3	22.6
最多数	47	153	71	129	58

2009年度に付随的に行った調査において、CASEC トータルスコアの伸びと多読、英語ジャーナルのスタンプ数の相関関係を調査したが、全体の相関係数は 0.027 でありこの2つのデータ間に明らかな傾向は見られなかった。ただし、下位のクラスが負の相関係数を表す中、上位のクラスのみが正の相関係数を表したことから、この課題は自律して課題に取り組むことが困難と思われる学生の多いクラスでは、別の手だてが必要ではないかと思われる。

4.4. 学生による授業評価

毎学期末に行われている授業評価(5点法)より、総合評価とそれぞれの科目についてたずねた項目の平均値を示したものが表6から表8である。数値は2008年と2009年は通年の平均値、2010年は必修であった春学期のみの平均値である。それぞれ、英語演習1、2、英会話の平均値は下記のとおりとなった。

表6 英語演習1（ネットアカデミー）

質問項目	2008	2009	2010*
授業の総合評価	4.05	4.19	4.50
声を出して英語を読む練習は必要だ	4.21	3.98	4.34
リーディングセクションで英語を読むことに自信がついた	3.26	3.60	3.63
リスニングセクションで英語を聞くことに自信がついた	3.30	3.75	3.76
個別授業ではなく一斉授業もしてほしい	2.81	2.86	2.96
ネットアカデミーを真面目にやれば英語力がつく	3.76	4.01	4.17

*2010年度は半期

ネットアカデミーにおいては、4.0～4.5の総合評価であり学生はネットアカデミーでの学習を肯定的にとらえているといえる。自分の学習スタイルに合致した場合、かなりの長時間にわたって自発的に学習に取り組む学生も見られ、このような学生の満足度は高かった。自学自習が基本であったので、一斉授業も必要かという質問も入れてみたが、これに対しては他の項目ほど評価が高くなかった。しかし、この数字には、自学自習がよいと思っている学生と、英語の授業自体受けたくないで一斉授業はいらないと思っている学生の両者が混在している可能性はある。単調になりがちなCALL教室での学習も、音読を取り入れたことで多少のメリハリがついたと思うが、音読に関しては肯定的な学生が多かった。

表7 英語演習2（多読、英語ジャーナル）

質問項目	2008	2009	2010*
授業の総合評価	4.25	4.48	4.07
正しく英語を書くには文法は必要だ	4.27	4.49	4.41
多読で英語を読むことに自信がついた	3.69	3.85	3.84
英語ジャーナルで英語を書くことに自信がついた	3.59	3.86	3.72
多読を通して単語力がついた	3.54	3.59	3.64
多読、英語ジャーナルを真面目にやれば英語力がつく	3.95	4.19	4.20

*2010年度は半期

多読、英語ジャーナルについてもネットアカデミーとほぼ同じような結果が出た。コンファレンシングなどで学生1人1人をきめ細やかにサポートした結果であると考えたい。学生達にはかなりの負荷があったとも思うが、ほとんどの学生は規定数を達成し

て、ある種の充実感と満足感を持ったようである。英語を書くにあたって文法が必要だという項目においては4.27～4.49と比較的高い値が出た。確かに提出物を見ている、文法力の低さが見受けられ、高校までで学習してきたことが定着していない印象が強い。学生自身も文法力が足りないという事は感じており、どこかでこれを補う必要はあるだろう。ただ、個人差が大きい集団の中でそれをどのような形で行っていくのかは、今後検討しなければならないだろう。

表8 英会話

質問項目	2008	2009	2010*
授業の総合評価	4.40	4.55	4.14

*2010年度は半期

英会話は総合評価のみであるが、4.14～4.55という結果であり、及第点の評価であると思われる。教員からは、学生は授業に熱心に参加しているものの、年々レベルが低下しているという報告もあり、ブックレポートの発表など人前で英語を話すことには抵抗のある学生も見受けられた。しかし、全体的には学生は英語で話すことを楽しみ、少しずつクラスに慣れていった。45分の授業時間は、学生にも教員にも適当であり、これは今後も続けていきたいと思う。

5. 今後の課題

3年間の共同研究から、カリキュラム改革後のプログラムがある一定の成果をもたらすことは確認できたが、課題もいくつか浮き彫りになった。

1つ目には、対面式指導と自学自習のバランスがあげられる。本プログラムでは自ら学びとって自律的な学習者になること、ある程度ボリュームのある時間をかけて、学習をさせることに力を置き、高校までのような文法指導やリーディングストラテジーなどの指導はほとんど行ってこなかった。しかしながら、基礎的な文法事項が定着していない学習者が多く、それがライティング、リーディングにも影響していることは否めず、出来ないーわからないーモチベーションが下がるー英語学習に対して嫌悪感が増すという、負のスパイラルが発生しているのではないかと思われる場面もある。これを断ち切るためには、英語学習が促進されるような文法指導やプロセスリーディングの技術を少しずつ取り入れていくことも必要かも知れない。

2つ目に、レベルごとの指導があげられる。今までは同じ教材を使用し、英語専攻の学生のみ学習範囲をやや広げると言う形で一律に演習を行ってきたが、やはりレベルごとにある程度変化をつけたプログラムが必要であると考え。英会話ですでに下位のクラスに対して取組みは始まっているが、上位のクラスにおいても課題量を増やすだけで

なく、質的に高度な課題を与えて、さらに英語力を強化する必要があるだろう。

6. まとめ

3年間の共同研究を通して、①CALL システムを活用し自律した学習者を育成する、②多読・英語ジャーナルにより受信・発信の両側面を鍛える、③コマ割りを工夫した上で英会話を少人数で行い、使える英語力を育成する、という3点を挙げて、カリキュラム改革に取り組んできた。

①に関しては、ネットアカデミー、多読・英語ジャーナルにおいて自学自習を基本とした課題を課し、内容に濃淡はあるものの、ほとんどの学生が自ら学習計画を立てて課題を終了させることができたことから、ある程度の達成を見ることができたと思われる。そこでの鍵は、教員の関わり方であり、学習の進捗に関しては学生の意思に任せながら、ゆるやかに、しかし厳正に学生を管理するということであった。

②では、多読によるブックレポートと英語ジャーナルを書くことにより、学生は受信・発信の両方の活動をコンスタントに体験した。ある程度の量の英語を、読み、書くことにより、学生の中では何らかの達成感があったように思う。「これらの活動を真面目にやれば英語力がつくと思う」という学生評価の項目には肯定的な意見が多く見られたことから、学生も「鍛えられた」と実感できたのではないだろうか。

③が今回のカリキュラム改革では一番大きな変化であったが、3年を経てほぼシステムとして定着させることができた。45分を2回行う英会話では学生のモチベーションも上がり、クラス運営もスムーズに行えるようになった。この形態は今後も継続していきたい。

上記3点の他には、カリキュラム改革の一番の成果として、中だるみ現象を解消し全体的な英語力の向上が図れたことがあげられる。これは標準化されたツール（CASEC）を使って継続的に英語力を測定した結果であり、今後も英語力の定点観測を続けていくことが、全体的な力を把握しておくことにおいても重要だと考える。

また、クラスを細分化したことで、かえって教員間のつながりが強まり、頻繁に情報交換が行われるようになった。各教員が自分の個性を出しながらも、シラバスや評価基準を遵守してプログラム運営ができたことも、学生の授業満足度を向上させる一つの要因になったのではないだろうか。英語演習と英会話との間でブックレポートを共有するなどの取組をはじめとして、英会話・英語演習の教員が一丸となって学生の英語力向上に貢献しようという雰囲気を醸成できたことも、今回の共同研究の成果といえるだろう。

この3年間で一般的な英語力強化に関しては一定の道筋をつけることができた。今後はベーシックな英語力の強化はもちろんのこと、より学生や社会のニーズにあった英語教育が望まれる。その一つの可能性としてキャリア・トレーニングとしての英語教育の

方向性も考えられる。社会ではグローバル化により英語の必要性が叫ばれて久しいが、短期大学での2年間という短い間にどれだけのことができるのかは未だ明確にはなっていない。ESP的な要素も取り込みつつ、少しでも将来のキャリアに結びつく英語教育を目指していくことが、今後の短期大学としての生き残りの1つの道であると思われる。今回の共同研究の経験を活かし、常に進化する英語教育を行っていきたい。

引用文献

- 岡秀夫 (編) (2010). 『グローバル時代の英語教育』 東京：成美堂
- 酒井志延 (2011). 「リメディアルと向き合う」『英語教育』 Vol. 53, 10-12.
- 大学英語教育学会学習ストラテジー研究会 (2006). 『英語教師のための学習ストラテジーハンドブック』 東京：大修館書店
- Kiyota, Y (2009). Motivation of Remedial EFL Learners (A Case Study of Japanese College EFL Learners). 『リメディアル教育研究』 Vol.4, No.2, 41-47

